

## 谷 富夫先生のご退職によせて

社会学科教授 松川 恭子

一 谷富夫先生は、2020年3月末をもって文学部教授を定年退職されます。先生は、1977年に九州大学文学部哲学科（社会学専攻）を卒業された後、1979年に九州大学大学院文学研究科修士課程（社会学専攻）を修了されました。1981年に同大学院博士後期課程を中途退学後、金沢大学文学部助手、九州大学文学部助手、広島女子大学文学部講師・助教授を経て、長く大阪市立大学で文学部助教授・教授、大学院文学研究科教授として教鞭を執られました。2011年4月に甲南大学に教授として着任された後、9年間にわたって教育研究に尽力されるとともに、各種委員、社会学科主任、人文科学研究科応用社会学専攻主任、文学部長と学内行政でも多大な貢献をされました。

谷先生のご研究は、五島列島のクリシタン村落から始まり、沖縄那覇都市圏、大阪猪飼野をフィールドとして、「都市」、「宗教」、「民族」を中心テーマに展開されてきました。その成果は、国内外の学会発表で発信され、単著3点、編著6点と多数の論文にまとめられました。いずれにも通底しているのは、変動する社会・関係性の中で人間がどのように生きるかを、生活者の視点から明らかにしようという問題意識です。最初の著書『過剰都市化社会の移動世代—沖縄生活史研究』（1989年、溪水社）では、本土から沖縄にUターンする人々の移動と「過剰都市化」の背景にある文化的要因が明らかにされています。九州大学から1993年に博士（文学）を授与された博士論文が元となった『聖なるものの持続と変容—社会学的理解をめざして』（1994年、恒星社厚生閣）では、「聖なるものへの信念と儀礼を通して救済を求める共同の営み」である宗教の展開を、伝統宗教、新宗教、民族宗教の様々な観点から、戦後の社会変動との連関で考察されています。最近の単著『民族関係の都市社会学—大阪猪飼野のフィールドワーク』（2015年、ミネルヴァ書房）は、1987年以来継続している大阪市生野区での調査に基づき、「エスニシティ」概念から出発し、コリアタウンにおける在日朝鮮人と日本人の民族関係の実現可能性

を探究しています。また、先生のご業績の中で注目されるのは、社会学の方法論への貢献です。特に生活構造の変動をみるのに生活史（ライフ・ヒストリー）法が有効と考え、実践するとともに、方法論に関する論考・編著書を発表されています。

学会活動では、日本都市社会学会、関西社会学会で会長を務められ、日本社会学会、西日本社会学会、一般社団法人社会調査協会の理事など、広く活躍されるとともに、日本学術会議連携会員や、日本学術振興会専門委員、財団法人大学基準協会委員、独立行政法人大学評価・学位授与機構専門委員など、日本の学問を支える活動もされてきました。

先生は甲南大学に着任される以前から後進の育成に力を注いでこられました。社会学科における教育活動でも、教育者としての先生の力量を存分に発揮されました。「理論を知らなければ調査の現場に出ても何も見えず、調査において経験したことが理論の理解に役立つ」という観点から、社会学の理論を具体的な事例をまじえ、わかりやすく学生に講義をされました。ゼミナールや卒業研究論文指導では、「現場に入って、そこで得られた経験とデータに真摯に向き合う」姿勢を学生に伝えられました。先生が1987年から続けていらっしゃる「生野オモニハッキョ」（在日朝鮮人を対象とする日本語識字教室）でのボランティア活動からも、学生たちは多くを学んだことでしょう。一人一人に対する指導の細やかさは学生の間にも知られており、「谷先生のゼミに行けば、必ず卒業研究論文が書ける」という声が聞かれました。さらに、大学院教育においても多くの学生を指導されました。

着任以来、教育研究だけでなく、学内行政においてもベテランの先生のご存在は、社会学科の私たちにとって安心感を与えてくださいました。改めて谷先生の甲南大学におけるご尽力とご貢献に心から敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。先生の今後のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。